

備忘録ないしは切り抜き帳(その124)

[2020年1月20日(月)]

○昨日まで全日本卓球選手権の試合が大阪で開催されており、昨日の最終日には個人戦の準決勝と決勝の様子が全試合TV中継された。全く比較にはならないが、最近ご近所の卓球同好会に参加させて頂いていることもあって、昨日は全試合をTV観戦させて頂いた。結果は今朝の新聞記事にもあるように、オリンピック代表選手が総崩れするという波乱に満ちたものであったが、試合内容は熱戦に続く熱戦で、特に若手の選手層の厚さが痛感された。今朝の東京新聞が珍しく大きく報じた『五輪組まさか 総崩れ 卓球・全日本選手権』の記事とNHKによるTV動画からのひとコマを以下に転載させて頂きたい。「◆18歳・宇田,初V 男子単 全日本選手権最終日は19日、大阪市の丸善インテックアリーナ大阪で行われ、女子シングルスは早田ひな(日本生命)が準決勝で伊藤美誠(スターツ)を4-3、決勝で石川佳純(全農)を4-1と、2人の東京五輪代表を破って初優勝を飾った。早田は伊藤と組んだ女子ダブルスと合わせて、2冠を達成した。女子と混合の両ダブルスを制して臨んだ伊藤は、史上初の3年連続での3種目制覇を逃した。石川は4大会ぶりの優勝に手が届かなかった。男子は18歳の宇田幸矢(エリートアカデミー)が決勝で東京五輪代表の張本智和(木下グループ)を4-3で破り初制覇した。宇田と早田は世界選手権団体戦(3月・釜山=韓国)の代表に決まった。◆張本「一気に自信なくなった」 土壇場レシーブ連続で失敗 最終第7ゲームは9-9。宇田の放った2本のサーブを張本は連続で打ち損じた。本来のプレーが鳴りを潜めた幕切れ。「コースを絞り切れなかった」。前々回の王者が返り咲きを逃し、卓球台の近くでぼうぜんと立ち尽くした。崖っぷちを切り抜けたまでは良かった。1-3で迎えた第5ゲームでは8-10と王手をかけられた。ここからラリーで粘り、サーブで崩して13-11で逆転。第6ゲームも11-6で奪取した。だが「よく耐えたけど、危ない試合はどこかで負けてしまう」と歯切れが悪かった。前回大会は準決勝でフルゲームの末に敗退した。「1ゲーム取られただけでも負けに近い気持ちになった。まだまだ幼かった」。後の海外ツアーを回る中で平常心を貫く内面を強化した。今大会は鬼門だった準決勝をフルゲームで勝利。焦りを見せない姿で成長の一端を示したが、再び頂点には届かなかった。「2位なので、特に何もなかった大会です」。意気込みが強かっただけに敗戦のショックは色濃い。「決勝1試合でここまで戦った自信が一気になくなった感じがある。また一からやるしかない」。東京五輪の開幕まで間もなく半年。教訓を胸に前に進むしかない。◆「攻めることだけ考えた」

18歳の宇田が、2年前のジュニアの部決勝でストレート負けした張本に雪辱、初優勝を飾った。2歳下の日本のエースを破り「守っているようじゃ勝てないと思っていた。攻めることだけを考えた」と納得の表情を浮かべた。世界ジュニア選手権で2018年男子シングルスで準優勝し、2019年混合ダブルスで優勝した有望株。全日本では前回の16強入りが自身の最高成績だった。今大会の目標は4強と定めていたが、両ハンドの強打を武器に王者まで一気に駆け上がった新星は「今回はぎりぎりでも勝つことができたが、今後も必ず当たる相手。次も勝っていきたい」とさらなる闘志を燃やした。

◆早田,女子単 意地の初V2冠 初優勝が決まった瞬間早田はその場にしゃがみ込み両手で顔を覆った。しばらく涙が止まらない。東京五輪出場を逃した19歳が意地の頂点。「これまで苦しいことや、頑張っても結果が出ない時が多くて、でも常にたくさんの方が応援してくれていたのだから」。優勝インタビューに会場は万雷の拍手に包まれた。伊藤との準決勝の最終ゲーム。「気持ちが強い方が絶対勝つ」と信じた。6-4でリードした場面で続いたラリー。クロス打ちから、タイミング良くストレートへ打ち込むと、相手は触ることができなかった。「思い切っていたのが良かった」 石川との決勝は序盤から攻めて多彩なサーブを繰り出し



男子シングルス決勝、宇田(奥)―張本(手前)戦の最終局面 (NHK 動画より)



女子シングルス決勝、早田(手前)―石川(奥)戦の最終局面 (NHK 動画より)

相手にうまくレシーブをさせない。武器とする力強いプレーだけでなく、緩急を織り交ぜ、勝利をたぐり寄せた。東京五輪代表の2人を連破しての栄冠。「やっぱり五輪に出たかった気持ちはある。でも逆に選ばれなかったことで、自分を追い込み、絶対優勝しようという気持ちがあった」。石田大輔コーチも「苦しい中でも本当に明るく楽しく、練習を頑張っていた」と目を潤ませた。自身の今年のテーマは挑戦。今後の4年間でどう変われるか。「いろんなことから逃げずに頑張る」。既に気持ちは東京の先へ向いている。◆伊藤、3年連続3冠逃す 伊藤は準決勝で前日に女子ダブルスで3連覇を果たし、喜びを分かち合った早田に競り負けて、史上初の3年連続3冠を逃した。快挙まで一歩及ばず「今日は早田選手が上回っていた。押され負け。1点を取るのが難しかった」と悔しさをにじませた。早田に持ち味のサーブや多彩な返球を繰り出され、最初の2ゲームを落とした。劣勢の中、徐々に盛り返して最終ゲームまで持ち込んだが、「ラリーになると一発がある」と評した早田に対応しきれず、最後は自身のサーブミスで敗れた。今年最大の目標となる東京五輪へ「練習するのみ」と前を向いた。」 [註]前ページに転載させて頂いた画像は以下のサイトからの引用である。
<https://sports.nhk.or.jp/olympic/sports/table-tennis/alljapan-result/>

[2020年1月21日(火)]

- 今朝の東京新聞の社説『首相施政方針 疑惑解明の意欲見えぬ』を以下に転載させて頂きたい。「通常国会がきのう召集された。安倍晋三首相は施政方針演説で、経済政策や社会保障改革に取り組む姿勢を強調したが、政権に向けられた疑惑の解明に努めようという意欲は全く見えてこない。今年の通常国会は夏に東京都知事選、東京五輪・パラリンピックを控え会期延長が難しい。政府は提出法案を最少の52本に絞って予算案や年金制度改革など関連法案の早期成立を期すという。虚偽報告や情報隠蔽は論外だが、政府が国民の代表で構成する国会と誠実に向き合わなければ、審議が公正に行われるはずがない。まず問わねばならないのは安倍政権の政治姿勢である。2012年12月に政権復帰した安倍首相は、第一次内閣を含めた通算在職日数で歴代最長記録を更新し続け、長期政権ゆえのおごりや緩みも顕著となっている。首相が地元支援者らを多数招待して「私物化」と批判を浴びた上に、招待者名簿の違法管理を続けた「桜を見る会」問題、カジノを含む統合型リゾート施設(IR)に絡み、現職国会議員が逮捕された汚職事件は、その典型だろう。しかし首相は、施政方針演説の中で桜を見る会やIRの問題には全く言及せず、疑惑解明に向けた決意や意欲は伝わってこない。昨年10月、公職選挙法に抵触する可能性がある「政治とカネ」の問題で閣僚が相次いで辞任したことについても触れずじまいだ。共同通信社による今月中旬の世論調査では、首相が桜を見る会の疑惑を「十分説明していると思わない」とする回答は86.4%に達し、IR整備を「見直すべきだ」と答えた人も70.6%に上る。首相はこうした国民の厳しい声を正面から受け止めているのか。桜を見る会は中止となり、2020年度は予算を計上していない、捜査中の事件のコメントは差し控える、というのが政府側の言い分なのだろうが、国民の理解が得られるとは到底思えない。自衛隊の中東派遣について「情報収集態勢を整え、日本関係船舶の安全を確保する」と述べたが、そもそも国会の審議や議決を経ず、政府のみの判断で自衛隊を海外に派遣することは妥当か。政権の長期化に伴い、国会を軽んじる姿勢も目立つ。三権分立の危機である。国会と誠実に向き合い、真実のみを述べ、情報を隠さず、野党の指摘にも真摯に答えるのか。議会制民主主義の基盤を成す政権の政治姿勢こそ、今年も問われ続けなければならない。」
- 同じく東京新聞の政治欄<論戦ファクトチェック>には『首相「八ッ場ダムが被害防止に役立った」でも利根川6ダムや遊水地も貯水』と題する記事が掲載されていたので以下に転載させて頂く。「安倍晋三首相は20日の施政方針演説で、昨年10月の台風19号の際に「八ッ場ダム(群馬県)が利根川の被害防止に役立った」と述べた。だが、当時は他の施設もフル稼働して水位を調節しており、利根川の治水で八ッ場ダムの効果だけを紹介するのは説明不足で、誤解を招きかねない。国土交通省関東地方整備局によると、台風19号で八ッ場ダムは約7500万立方メートルの水を貯留した。完成前に水をためて安全性を確認する「試験湛水」の段階にあり、担当者は「極めて低い水位から満水近くにまで達した特殊な状況だった」と説明。完成後も同じ量の水を貯留できるわけではないとの見方を示した。利根川上流域のその他のダム6ヵ所でも、計約7000万立方メートルを貯留し、八ッ場ダムとともに群馬県内で水位を約1メートル下げた。担当者は八ッ場ダム単体でどの程度を下げたか「検証していない」とする。茨城、栃木、群馬、埼玉の4県にまたがる利根川中流域の渡良瀬遊水地も約1億6000万立方メートルの水を貯留した。経済・雇用関連でも首相演説には誇張が目立った。「九割近い中小企業で賃上げした」と強調したが、従業員100人未満の企業の調査結果を含んでいなかった。別の民間調査では、賃上げは六割近くにとどまる。内閣府によると、演説に引用されたのは厚生労働省の「2019年賃金引き上げ等の実態に関する調査」で、100~299人規模の企業が賃上げした割合は89%。30人以上の一部企業も対象だが、集計中で反映されていないため、厳密には不正確な状態だ。日本商工会議所の昨年末時点での

調査では、賃上げした中小企業は58%。人手不足でやむを得ず賃上げした企業が半数以上。首相は昨秋の所信表明演説に続き「八割の高齢者が65歳を超えても働く意欲がある」と主張した。本紙のファクトチェックでは「八割」は仕事をしている人に限って統計を再処理した数字。実際は高齢者全体の五割強にとどまった。(署名記事) 統計データは、設定条件や母数の取り方などに十分注意しないと、無意味な結果や、時には間違った結果を与えることがある。今回のように意図的に統計処理を操作して、自説に有利な結果を導き出すのは、良くない政治家の常套手段で、全くもって許しがたい行為である。

- ネットを見ていたら『「已む」読めなかった？ 安倍首相が歴史的儀式で驚きの大失言』と題するジャーナリスト・田岡俊次氏のツイートが目についたので、以下に転載させて頂く。「2019年4月に行われた「退位礼正殿の儀」歴史的な儀式での、安倍首相の失言が世間を騒がせた。ミスは誰にでもあるが、それを防ぐ準備は十分だったのか？ 首相の姿勢が問われる。4月30日、「退位礼正殿の儀」で、安倍晋三首相はおそらく歴史に残る大失言をしてしまった。それが起きたのは「国民代表の辞」のほぼ末尾だ。「天皇、皇后両陛下には末永くお健やかであらせられますことを願っていません」これでは、国民の大多数の願いとは全く逆だ。文書として公表された「国民代表の辞」には当然「願ってやみません」とある。なぜこんな間違いが起きたのか。動画を確認すると、安倍氏は懐から出した文書を読み上げたのだが「あられますことを願って」まで進んだところで一瞬口ごもり、その後で「あられますことを願っていません」と発言していることがわかる。「願ってやまない」の「やむ」は「已む」と書く。「己」や、十二支の「巳」と紛らわしい字ではある。安倍氏が手にした原稿では教養のある官僚が漢字で書いていたため



「退位礼正殿の儀」で天皇、皇后両陛下に「国民代表の辞」を読み上げる安倍晋三首相／2019年4月30日、朝日新聞社の写真より

なんと読むかためらって「願っていません」と言ってしまったのではないかとも思われる。安倍氏は2017年1月24日、参議院本会議で蓮舫議員に対し「訂正でんでんという指摘は全く当たりません」と答弁した。これは「云々」を「伝々」と誤って覚えていたようだ。もし「国民代表の辞」の原稿にひらがなで「願ってやみません」と書いてあったのに「願っていません」と言ったのなら、安倍氏は「願ってやまない」という言葉を知らないほど語彙が乏しいのか、意図的に変えたのか。どちらも少々考えにくい。当意即妙が求められる国会答弁なら「でんでん」も笑い話で済むが今回の舞台は憲政史上初の儀式だ。その重要な場で国民を代表し、天皇、皇后両陛下に直接あいさつをするのに、下読みも十分にできなかったなら怠慢の極み。皇室に対する敬意を欠いていると言われても仕方が無いだろう。だがテレビや翌日の新聞は、公表された原稿の内容を伝え、言い誤りはほとんど報じなかった。記者が聞き耳をたてず、発表文書に頼る風潮を示しているように感じられる。私が5月3日に動画サイト「デモクラ・テレビ」の討論番組で「あきれた失言」と話すと、他の出演者は「それは初耳」と驚いていた。その後、右翼団体「一水会」が6日ごろからインターネットで批判を始めるなど、言い間違いへの非難は徐々に広がっている。このように趣旨が逆転する失態が起きた例としては、1899年5月24日の読売新聞社説がある。原稿には「全知全能と称される露国皇帝」とあったのが「無知無能と称される露国皇帝」と誤植された。主筆が毛筆で右肩上がり崩し字を書いたため「全」が「無」に見え、活字を拾う工員が間違えたのだ。国際問題にもなりかねず、同紙は訂正号外を出し、ロシア公使館に釈明陳謝して事なきを得たという。1631年にロンドンで発行された「姦淫聖書」事件も有名だ。十戒の一つ「汝姦淫すべからず」の「not」が脱落し、「姦淫すべし」となっていた。教会は組織をあげて回収、焼却したが、残った数冊は今も珍書として高価で取引される。出版元の主は300ポンド(現在の価値で1500万円に相当か)の罰金を科されたが支払えず、投獄され獄死したという。戦前の日本では皇室に対する不敬罪があり「天皇陛下」を「階下」と誤植して出版禁止の行政罰をうけた出版社もあった。新聞社は「天皇陛下」の4字を一つにした活字を作るなどして、過失の防止に努めた。幸い今の日本には不敬罪はないが、国民を代表しながら「未曾有」の失言をしたのはなぜなのか。安倍氏はそのいきさつを国民に釈明するべきだろう。」

- 今日の朝日新聞デジタルに掲載されていた『「少数派の権利をコケに」憲法学者が語る首相の国会観』を以下に転載させて頂く。「首相主催の「桜を見る会」をめぐる文書の廃棄、森友学園問題での財務省の公文書改ざんなど、国民の知る権利をないがしろにするような政府の対応が目立つ。憲法が位置づける「国権の最高機関」として、国会は安倍晋三首相と政府にどう向き合うべきなのか。通常国会での論戦を控え、憲法学者の高見勝利・北海道大名誉教授にあるべき姿を聞いた。安倍さんが2016年と18年の国会審議の答弁で「私は立法府の長」と言及しました。重ねての発言は決して言い間違いではなく、本音ではないでしょうか。同時に「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄の言葉が思い起こされました。尾崎は1946年、大日本帝国憲法を現行

憲法に改正する衆院本会議で請われて登壇し、語りました。「民主主義となる以上は、国家の政治の主体が国会になければならぬ。行政府はその補助機関ともいべき位置に立つのです」と。天皇主権の帝国憲法では、政府が政治の主体であり、国会はその補助機関に過ぎなかった。尾崎は憲法改正にあたり集まった議員に「変わらなきゃいけないと覚悟があるのか」と問うたわけです。しかし、安倍さんの発言を踏まえて政府と国会の関係をみると、「主客」は、残念ながら70年余り経った現在も変わっていません。安倍さんは、野党が憲法に基づき求めた臨時国会召集を放置し、衆院解散に踏み切った。与党は参院規則による予算委員会開催要求にも応じなかった。憲法に根拠を置く少数派の権利をコケにしています。安倍さんは現行憲法について「大きな強制の中で制定された」「日本人の精神に悪い影響を及ぼしている」という認識を披露しています。改憲を自らの責任のように語る姿からも、GHQ(連合国軍総司令部)による「押しつけ憲法」を守る必要があるのかという意識が垣間見えます。行政府のトップとして憲法を守る意識があるか疑問です。野党は予備的調査を活用せよ 行政府が憲法から逸脱したような行為を繰り返すのに対し、立法府は打つ手がないのでしょうか。戦争へと突き進んだ反省から現行憲法では、国会に新たに国政調査権が付与されました。憲法学の権威だった美濃部達吉が「失政があると思えば種々の権限を利用して矯正する権限がある」と解説した重要なものです。国政調査権の中核は、政府文書を提出させることですが、今の国会は官邸の意向に沿って、多数を持つ与党が決めるから文書は出てきません。廃棄までされています。行政を監視するうえで、最も有効なこの武器がさび付いた状態です。野党は衆院規則に定められた予備的調査を使うべきです。国政調査権を補完するものですが、40人以上の議員の要請で衆院の調査局長や法制局長に下調査を命じることができます。官僚を集めた野党の合同ヒアリングはパフォーマンスに過ぎず、文書は出てこない。予備的調査は地味ですが、国政調査権の起点となり得ます。帝国議会が開設される前、政府高官による公私混同が横行しました。「議会さえできれば国民に対する窓ができて不正はなくなる」との考えがありました。だが、自然に良くなるものではないことは現状をみればわかる。国会は国民が投票で構成員を選ぶ唯一の国家機関であり、国民をバックに政府という権力に迫り、その内部活動をチェックすることができる場です。議員のたゆまぬ努力と国民の厳しい視線なくして、よい国会への道筋も見えてきません。(聞き手・永田大, 三輪さち子) ◇ たかみ・かつとし 1945年生まれ。北海道名誉教授。専門は憲法学。著書に「憲法改正とは何だろうか」など多数。」



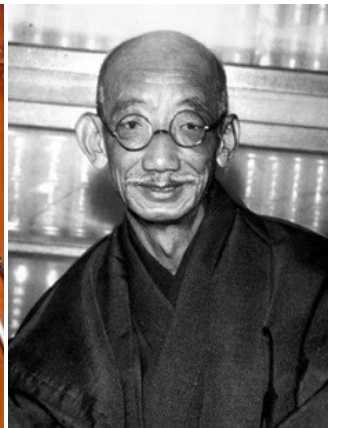
インタビューに応じる高見勝利・北海道大名誉教授=東京都台東区



1946年の第90回帝国議会の衆議院本会議で憲法改正案について討論する尾崎行雄氏



衆院本会議で演説をする安倍晋三首相 =2020年1月20日、国会



憲法学者の美濃部達吉氏

[2020年1月22日(水)]

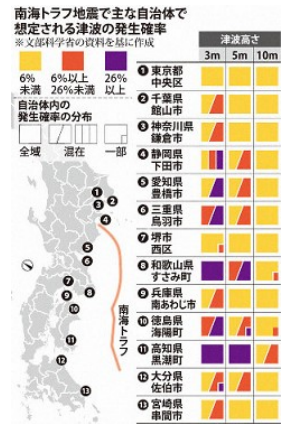
○今朝の東京新聞社説に『チバニアン命名 科学は一日では成らず』と題する論評があったので、以下に転載させて頂く。「チバニアン(千葉時代)が地質時代の名称に決まりました。千葉県市原市の川沿いにある崖に、地磁気の逆転という地球史上の大事件の記録が残っていることが国際地質科学連合に評価されました。富士山の青木ヶ原樹海はコンパス(方位磁針)が狂うので一度入り込むと出られない、という伝説があります。樹海は富士山の溶岩の上にあります。溶岩が冷えて固まる時、中に含まれている磁性鉱物が磁場の影響で並びます。この方向を調べれば、溶岩が固まったときの磁北(磁石の指す北)が分かります。でも、磁石を狂わせるほどの磁力はありません。100年近く前の1926年、松山基範京都帝大教授は兵庫県の玄武洞で溶岩を調べていて、磁北が現在とは逆に南向きなのを発見しました。当時は一つの岩石を測定するのに4時間かかったそうです。その後、国内や朝鮮半島、中国東北部でも調査した結果、ほぼ半数が逆を指しました。松山教授は1929年に「地球磁場が逆転していた」と発表しました。地球の内部構造がまだほとんど分かっていなかった時代。

N極とS極が入れ替わるというのは大胆な仮説です。学界からはほとんど無視されました。広く認められるようになったのは1960年代です。海洋底の調査から何度も磁場の逆転が起きていることが分かりました。磁場の逆転は、地球の表面は何枚かの大きな岩板でできているという、プレートテクトニクス理論が誕生するきっかけの一つとなりました。日本列島は日本海が拡大するとき、逆くの字形に曲がったという説も生まれました。チバニアンは約77万年前から約12万年前までの時代です。市原市の崖は「千葉セクション」と呼ばれ、最後の地球磁場逆転が起きた証拠が残っています。崖の下部は磁場が現在と逆ですが、上部は今と同じです。その境界より上がチバニアンという時代です。玄武洞での発見から論文発表まで3年、認められるまでに30年以上もかかっています。時間もお金もかかっていたことがわかります。近年、経済的に役に立つ研究かが問われ、すぐに結果を求める風潮があります。今回の命名決定のニュースは、基礎研究はもっと長い目で見なければいけない、ということを教えてくれます。そして、科学の成果は知的財産であることも忘れてはいけません。」

- 今朝の東京新聞「本音のコラム」に掲載された齋藤美奈子氏の『同化政策に抗う』を右に転載させて頂く。新藤順丈の『宝島』は読ませて頂いたが、川越宗一氏の『熱源』は未読なので、ぜひ読ませて頂きたい。

[2020年1月25日(土)]

○今朝の毎日新聞社説の『南海トラフの津波予測 防災につなぐ政策が必要』と題する論説記事を、以下に転載させて頂きたい。「政府の地震調査委員会が、今後30年以内に起きる可能性が高まっている南海トラフ地震で、大津波が発生する確率の推計を公表した。規模(M)が8~9級の地震で津波の高さが3メートル以上、5メートル以上、10メートル以上となる3パターンを想定し、地域ごとにそれぞれの起こりやすさを調べた。たとえば、3メートル以上の津波は、26%以上の確率で九州から東海の広い範囲に及ぶという。木造家屋が流失し始める規模の津波が、100年に1度以上に相当する確率で押し寄せる計算だ。政府は2012年にも津波の高さの推計を公表している。この時はM9.1という考えられる最悪のケースを想定した。このため、最大34メートルの津波が太平洋沿岸を襲うという衝撃的な内容となった。ただ、この規模のものは過去2000年は起きていない。前年の東日本大震災を教訓に、地震津波対策の合言葉となったのは「想定外をなくす」だった。しかし、被害想定があまりに甚大であるため対応しきれないとして、自治体や住民らの一部に対策を手控える傾向も生んだとされる。今回の予測は、防潮堤などハード面の整備で対応できる範囲の津波が起きる確率を示した。すぐに「最悪」に備えられない自治体が、今後の対策に優先順位をつけるうえでの参考になるだろう。一方で、これまで「最悪」の被害想定に基づき、避難施設整備や庁舎移転などの対策を進めてきた自治体もある。この想定と切り離して、今回もう一つの被害予測を政府が示したことで、自治体に戸惑いが広がる恐れもある。2012年の想定を公表したのは国の防災政策を議論する中央防災会議の作業部会だ。会議はその後、調査結果に基づく防災対策もまとめた。これに対し、今回の地震調査委員会は、あくまで調査・研究の機関だ。予測を今後の防災対策に活用するかどうかは国や自治体次第となる。政府は今後、推計結果を自治体側に説明する。だが、それだけでは十分とは言えない。予測を国の防災政策に取り込み、自治体が正しく活用できる道筋をつけるべきだ。」



高知県黒潮町の津波避難タワー =2019年11月(共同通信より)



防波壁に囲まれた中部電力浜岡原発=2015年12月(朝日新聞より)

🗨 ついでながら、記事に関連のある「南海トラフ地震で主な自治体で想定される津波の発生確率」、「黒潮町の津波避難タワー」、「3.11のあと浜岡原発に追加された防波壁」の図や写真を追加させて頂いた。